

令和元年6月13日現在

機関番号：32636

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02979

研究課題名(和文) 小学校教員の英語発音能力向上プログラムの開発と検証：対面指導と遠隔教育の比較

研究課題名(英文) Development and Evaluation of Program for Elementary School English Instructors to Improve Their Pronunciation Skills: Comparison of Face-to-Face Instruction and Distant Learning

研究代表者

淡路 佳昌 (Awaji, Yoshimasa)

大東文化大学・外国語学部・准教授

研究者番号：90259820

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究を通じて、小学校教員に対して発音スキルに関する対面指導が短期間でどの程度の効果を生むか、より効果的な指導のためにどのような改善が求められるかが、実際に開発したプログラムを使用して実施した2年にわたるワークショップ等の実証である程度明らかになった。ウェアラブルカメラなどのデジタルツールを活用することによって、個別指導での指導の分析や可視化を行うことができた。今後は遠隔学習の可能性と効果について、時間的制約等をクリアしながら研究を進めていく予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、発音に苦手意識を持つ小学校教員の発音スキルを、集中的な個別指導によって短時間である程度向上させることができるプログラムを開発することができた。このプログラムを用いて実施した数回のワークショップにおける映像データや受講者のスキル向上度などを分析することによって、指導の所要時間や内容と、受講者の発音スキルの向上度の関連について可視化することができ、今後の指導内容改善の土台となる情報が得られた。これらの得られた成果は、今後の教科化を控えた小学校の英語指導において、教員のスキル向上という点から資するものとなる。

研究成果の概要(英文)：This research revealed to certain extent how much improvement in pronunciation skills can be expected among elementary school teachers by intensive instruction. The outcome of the workshops indicated that many of the popular pronunciation errors can be corrected and the participants' awareness toward pronunciation has been raised. The instruction and the participants' response were recorded with digital tools such as wearable cameras and tablet devices, which provided specific data to visualize the characteristics of coaching such as time spent on each learner, what instruction was given, and how the response changed. More research needs to be done to investigate the possibilities and effectiveness of distant learning, and how to overcome the limitation of time available to teachers.

研究分野：英語教育学

キーワード：小学校英語 発音指導 個別指導 ICT

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

小学校に外国語活動としての英語が導入され久しいが、依然として指導に当たる教員の間では、特に音声面のスキルについて不安を感じる教員が多い。特に、発音面では教師が自信を持っていないために、学習者への音声指導が疎かになっている懸念もある。そもそも外国語活動導入時の期待される効果として音声スキルの早期開発が挙げられていたが、この問題を放置したままでは、その効果が期待できない。また、現場教員が多忙のため、トレーニングのために集まる機会を設けるのも難しいという現状もある。休日に開催される研修などで開発したプログラムを活用して指導に役立てると共に、タブレット端末等を活用して遠隔学習の形で研修を実現することも求められる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、小学校教員の英語発音能力と指導力を向上するためのプログラム開発とその効果の検証を行うことである。具体的には、小学校で必要となる語句や文に重点を置いた発音指導教材を編成し、その教材を用いて小学校教員に対して継続的な訓練を実施し、その学習プロセスと成果の検証を試みた。

当初の計画では、継続的な対面指導を実施するグループと、対面指導とタブレット端末を用いた訓練を併用するグループ、タブレット端末を用いた訓練のみを行うグループに分けて指導を行い、その効果を比較することが目的の一つであった。しかし実際には、多忙を極める現場教員が本務に加えてタブレット端末で指導を受ける時間を捻出することは非常に困難であった。そこで、タブレット端末は対面指導の補助的手段や、学習の進捗変化を記録するためのツールとして活用し、分析の中心を対面指導の実証分析に置くことにした。具体的には、複数のタブレット端末にモデルとなる映像付きの音声モデルを準備しておき、参加者が必要に応じて適宜個人的に参照できるような支援ツールとして活用したり、タブレット端末や指導者に装着したアクションカメラによって指導の様子を記録し、その映像を元に対面指導の詳細な分析を行った。

3. 研究の方法

初年度および次年度では、小学校教員向けに、頻繁に見られる基本的な発音上の困難点を改善するためのプログラムを考案した。そのプログラムを、実際に小学校で指導に当たっている教員を中心とした集団に対するワークショップで使用し、指導の経過や受講者の変化、また指導前後の受講生の発音に対する認識の変化を質問紙によって調査した。

最終年度では、最初の2年間に実施した小学校指導者向けのセミナー等で得られた指導場面のデータを、指導者の助言内容や時間、回数、受講者の発音スキルの変容について分析を行ない、その成果を学会で発表した。

4. 研究成果

本研究を通じて、小学校教員に対して発音スキルに関する対面指導が短期間でどの程度の効果を生むか、より効果的な指導のためにどのような指導が求められるかが、実際に開発したプログラムを使用して実施した2年にわたるワークショップ等の実証である程度明らかになった。ウェアラブルカメラなどのデジタルツールを活用することによって、個別指導での指導の分析や可視化を行うことができた。今後は遠隔学習の可能性と効果について、時間的制約等をクリアしながら研究を進めていく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

静哲人・淡路佳昌(2019)「小学校教員対象の英語発音ワークショップの効果：質問紙および録画映像の分析」『語学教育研究論叢』第36号(大東文化大学語学教育研究所), 1-20. 査読有

静哲人・淡路佳昌(2018)「小学校の先生のための「手取り足取り発音講座」」『言語教育エキスポ2018予稿集』, 86-87. 査読無

静哲人・淡路佳昌(2017)「小学校の先生のための「手取り足取り発音講座」」『言語教育エキスポ2017予稿集』, 76-77. 査読無

静哲人(2016)「静先生のアプリド読み発音道場」『NHKテレビテキスト エイエイGO!』

〔学会発表〕(計8件)

静哲人・小山内滉(2019)。「あの喧騒のなかで何が起きているのか? 図表および数値による「グルグル」発音指導見える化の試み」関東甲信越英語教育学会第43回神奈川研究大会(横浜国立大学)[発表決定]

静哲人・淡路佳昌(2018)「小学校教員対象のグルグル発音指導の効果 ウェアラブルカメラ映像と事前・事後パフォーマンスの比較」関東甲信越英語教育学会第42回栃木研究大会研究発表(白鷗大学)

静哲人(2018)「歌のみを教材とする大学授業 グループ「グルグル」4年目の実践」全国英語教育学会第44回京都研究大会研究発表(龍谷大学)

淡路佳昌・静哲人(2017)「小学校教員対象のグルグル発音指導の効果 音素別、状況別の自己認識と実際のパフォーマンス」関東甲信越英語教育学会第41回新潟研究大会研究発表(新潟大学)

静哲人(2017)「TOTAL ENGLISH 1, 2, 3によるクリアな発音指導のためのワークショップ」千葉県八千代市英語教育研究会ワークショップ(千葉県八千代市立睦中学校)

静哲人・淡路佳昌(2017)「小学校の先生のための『手取り足取り発音講座』」言語教育エキスポ2017(早稲田大学).

静哲人(2016)「セグメンタルにこだわりセグメンタルを超える発音指導:次世代につなぐグルグル授業の形と役割」LET第56回全国研究大会ワークショップ(早稲田大学)

淡路佳昌(2016)「Endangered Teaching Skills Behind Flooding Technologies」The Seventh CLS International Conference CLaSIC 2016(国際学会)研究発表(シンガポール国立大学)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.st.daito.ac.jp/t068421/Kaken/AwajiShizukaKakenReport2019.pdf>

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：静 哲人
ローマ字氏名：SHIZUKA, Tetsuhito
所属研究機関名：大東文化大学
部局名：外国語学部英語学科
職名：教授
研究者番号（8桁）：60270211

(2)研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。